



特定医療法人社団

鵬友会 ニュースレター

鵬友会ホームページ アドレス
<http://www.hovukai.org/>

第82号

発行:2013年2月15日
発行責任者:
特定医療法人社団 鵬友会
事務局長 池島 守



生ききるために

～医師と老衰～

新中川病院 院長 福田 千文

最近、亡くなる患者様に「老衰」と死亡診断書を書くことが多くなりました。「老衰は病名ではない。死亡診断書には病名を書くべきで、科学的でない老衰という言葉は不相当である」という批判は医療者に多い。「老衰は是か非か」という議論もあるところですが、私は敢えて「老衰死」というものを認めようとしています。病院に入院、療養治療をうけた末に、確かに老衰死は存在すると実感するからです。

老衰のプロセスについては3月の研修会でお話ししますが、この老衰プロセスは誰にでも訪れる宿命です。この期に至っては、人工栄養を含め、過度の医療的関わりを行うことは不毛であり、本人及び御家族に対して大きな負担と苦痛を与えることになると私は確信しています。私共の病院へ入院してくる患者様のほとんどがこの老衰期に入っている方々です。今まで沢山の患者様を診て、医師としての役割の中で誠実にやってきたつもりでしたが、治療の在り方を根本的に見つめ直す必要性を感じています。高齢者の最終章である老衰において、医療の関わりの意味をしっかりと判断していく、医師の意識改革が大切ではないかと考えています。老衰のケアに関して医師がどのような役割を果たせるか、その意味を十分に意識することが必要です。

医学は科学です。しかし、医療とは単なる科学ではなく、人を診る科学です。変化する状況を判断し、患者様やその家族の思いや事情までも十分に配慮した上で、最善と思う治療をきちんと責任の自覚を持った上で行うべきだと思うのです。「この患者様にとってのこの治療の意味は何か」という気持ちを忘れてはなりません。医師は医療者である以前に看護者、介護者でもあり、時にはそれ以上でもある存在です。

意識がまだはっきりしている患者様は余命いくばくもないことを本人が一番良く知っていると思います。安易な気休めや励ましはかえって本人を孤独にすると思うのです。なるべく密に寄り添って、笑顔を見せて、手を添えて、自然に医療者としての関わ

りを持つことが、良い治療になるのではないのでしょうか。私は病室をよく回りますが、出来るだけ元気な姿で、明るく振舞います。全く反応の無いような人達でも、そっと触れ、声を掛けることもあります。「独りしゃべり」をしているようなものですが、でもきっと何か通じているような気がします。

「和顔施」という言葉があります。笑顔は施しです。微笑みは誰にとっても安らぎを与えます。病室でベッド上の生活を余儀なくされた人達。どんなことをしても、その苦痛、孤独感を癒すことは出来ないと感じますが、出来ることはあるはず。医師にとって、医療行為以外の役割がまだまだ求められていると思うのです。私は院長就任以来、一貫して本来の医療と病院の在り方を追求してきました。しかし、限りある命ギリギリの人達にどのように関わるかは難題です。

平成21年3月に「心安らかに看取る医療とは」という市民講座を開きました。今年3月には「あなたらしく“生ききる”とは」という市民講座を予定しています。自分らしく生きることが大変難しくなっています。生きたくても生きられない。死にたくても死なせてくれない。高齢者対策は仕組みばかりの社会整備ばかりで、益々生きづらいのではないのでしょうか。これから老いていく人達にとって、窮屈で不安な社会が待ち受けていることこそ懸念されることでしょうか。ともあれ、死を直前にしている患者様に少しでも安らぎの看護医療をと考えている毎日です。

過ぎたことを悔やまず、先を憂えず、今ある生に感謝して生きるのみです。私の故郷のある老人施設の入口にかけてある言葉。

1. 高いつもりで低いのは教養、低いつもりで高いのは気位。
2. 深いつもりで浅いのは知識、浅いつもりで深いのは欲。
3. 厚いつもりで薄いのは人情、薄いつもりで厚いのは面の皮。
4. 強いつもりで弱いのは根性、弱いつもりで強いのは我。
5. 多いつもりで少ないのは分別、少ないつもりで多いのは無駄。

條々自戒自照。長いようで短いのは一生。いつ死んでもよし、いつまで生きてよし。

平成24年度

看護科長等合同研修を開催しました。

H25.1/19 (土) 湘南泉病院 会議室



【湘南泉病院
片桐 看護部長】

『科長は現場のキーパーソン』

片桐看護部長は「チーム医療における看護管理者が実現できること」と題した講義を行いました。始めに、厚生労働省が2010年に打ち出したチーム医療推進の経緯や考え方を説明し「多職種連携が必要なチーム医療において、情報の要となって現状を把握し、提案・協議・検討内容を現場に浸透させるキーパーソンになって下さい」と科長の担う役割について強調。さらに、チームワークを形成する5つの要素を示し「チーム力を発揮するためには、自ら実践して見せる看護への“熱意”が何より大切」と述べました。講義の最後「スタッフは科長の後押しを待っている」と呼び掛け、科長に対し更なる奮起を促しました。



講義後のグループワーク



鵬友会全施設の科長17名が参加しました。

神奈川県立保健福祉大学実践教育センター

『ファーストレベル研修を終えて』

飯田科長は「スタッフとの関係が上手くいかず、悩んでいた」と自らの体験を語り、研修について「自分が相手に与える影響について考えるきっかけとなった」と振り返りました。そして、研修後のスタッフとの話し合いでは、お互いの思いを共有することができたと話し「自分の一言や態度は時として凶器になることを忘れず、管理者としての感性を磨く努力をしていきたい」とこれからの抱負を語ってくれました。



【横浜ほうゆう病院 飯田 科長】



節分で鬼退治

横浜保育室ほうゆう

平成25年2月1日(金) 保育園で節分の豆まきを行いました。突然現れた鬼に、子どもたちはビックリ！泣く子、逃げる子、はたまた勇敢に立ち向かう子…。反応は様々ですが、1年間園で過ごした子どもたちの、確かな成長を見ることができました。3月の卒園・進級の時期まであとわずか。心に残る思い出をもっと増やしていきたいと思っています。



◆あ◆と◆が◆き◆

寒さ厳しい折、皆さまいかがお過ごしでしょうか。新年度に向け、何かと忙しく日々が過ぎてしまいますが、くれぐれも体調にはお気を付け下さい。

さて来月8日に新中川病院で市民講座を開催しますが、案内チラシを配布させて頂いた地域の方から、先日1枚のはがきを頂きました。「仕事とぶつかり参加できずとても残念です」という内容でしたが、その前後の文章には感謝の言葉が綴られ、差出人が書かれていないものの、相手の方の気持ちが十分に伝わり“やっけて良かった”と思う瞬間でした。これを励みに、皆さまのお役に立てる情報をこれからもどんどん発信していきます。

記：福島